

原 著

幼児後期の日常生活動作維持を目指しての試み ～点滴用シーネ固定を外して～

長岡中央総合病院、4階東病棟：看護師¹⁾、同病棟師長²⁾

中野 綾美¹⁾、佐藤あゆ美¹⁾、渡辺 友美¹⁾、稲川美由紀²⁾

目的：持続点滴治療中の、3歳から就学前の6歳までの幼児を対象に食欲や活気が出てくる入院3日目にシーネ固定を外すことで、幼児後期における児の日常生活動作を維持できるか検証した。

方法：喘息や気管支炎、肺炎、胃腸炎等で入院している児に対し、入院3日目に実施される初回点滴刺入部の観察及びテープ交換（以下、シーネ点検とする）を行う際に、シーネ固定を外すことについて同意が得られた児のシーネ固定を外す。また、入院6日目または退院前にシーネ固定を外した事により、日常生活動作（スプーンを持つことができる、茶碗を持つなど）が行えているか、児本人、及びその家族に聞き取り調査を行い、日常生活動作の維持の達成度に関して面接法により集計・分析を行った。

成績：シーネ固定を外した事により、児が自ら行動する様子が多く見られ、児の個性や状態に合わせてシーネ固定の必要性を考えることが児に寄り添った看護に繋がった。

結論：シーネ固定を外すことで、妨げられていた日常生活動作が行いやすくなった。

キーワード：幼児期後期、日常生活動作の維持、持続点滴、点滴用シーネ固定、遊び、成長発達、聞き取り調査

緒 言

当院病棟小児科は、急性期疾患での入院が大多数であることや、成人と比べ血管が細く、血管確保が困難であるため、入院から退院まで24時間の持続点滴末梢静脈注射（以下、持続点滴とする）が実施される。手背に持続点滴をしている児には点滴用シーネ固定（以下、シーネ固定とする）を行っている。しかし、治療が進み症状の改善が見られていても機嫌が悪く、家では出来ていた日常生活動作でも、介助を必要とする児がいる事に疑問を感じた。そこで幼児期後期の発達年齢を考慮しながら、入院中であっても日常生活動作の維持を目指す取り組みの一つとして、食欲や活気が出てくる入院3日目にシーネ固定を外す試みを実施し、その有効性について検討した。

対 象 と 方 法

対象：2014年8月29日～10月31日の間で、A病棟に入院している3歳から就学前の6歳、手背に持続点滴をしている児及びその家族を対象とし、本研究に同意が得られた21名（3歳：8名、4歳：2名、5歳：8名、6歳：3名）

方法：入院3日目、初回点滴刺入部の観察及びシーネ点検を行う際に同意を得、シーネ固定を外す。

面接法：入院6日目または退院前にシーネ固定を外した事により、日常生活動作（移動、更衣、遊び、食事動作）維持可能であったかに関して、児本人及びその家族に聞き取り調査用紙を用い聞き取り調査を行う。

評価法：シーネ固定を外すことの有効性について分析を行った。

結 果

1. 日常生活動作の維持に関して：

【移動】（図1）

シーネ固定をしている時と比べて、点滴台を押して歩く時・ドアの扉を開けると、点側の手を使用できたか：シーネ固定使用時介助が必要だった81.0%のうち、53%ができるようになった。

【更衣】（図2）

シーネ固定をしている時と比べて、トイレでのズボンの上げ下げ、更衣の際両手で衣類を持って着替えようとする事はできたか：シーネ固定使用時介助が必要だった85.7%のうち、56%が出来るようになった。

【遊び】（図3）

シーネ固定をしている時と比べて、両手を使用して遊ぶ事はあったか。点滴側の手でおもちゃを持って遊ぶことはあったか：シーネ固定使用時使用していなかった66.7%のうち、93%が出来るようになった。

【食事動作】（図4）

シーネ固定をしている時と比べて、点滴側の手を使って茶碗や箸を持って食事が出来るようになったか。歯磨き、うがいは自分で行っていたか。食前等、手指の清潔は保つことは出来たか：シーネ固定使用時介助が必要だった76.2%のうち、81%が出来るようになった。

2. シーネ固定に対する児・保護者の意見(表1)

シーネ固定を外すことにより、点滴刺入側の手も自由に使えるようになったことから、シーネ固定を外すことに対し、好意的な意見が多く聞かれた。

考 察

入院している児の多数は乳幼児期であり、成人に比べ血管が細く血管確保が困難であるため、手背に持続点滴をされる事が多い。そのため、シーネ固定をすることで点滴不良を防ぎ、安全に治療が行えると考えていた。しかし、シーネ固定は、手指運動が妨げられるため、物をつかむ等の動作が行いにくくなっているという現状がある。

幼児後期は社会生活を送るうえで必要な基本的能力を獲得する時期である。更に、自律性が進み、自主的に取り組むことが増える。このような時期の児にとって、手関節をシーネで固定し、自由に動かせないことは、大きなストレスとなっていたのではないかと考えた。また、危険理解が出来るようになる年齢のため、シーネ固定を外しても、刺入部や点滴ルートに注意しトラブルを起こすことなく治療ができるのではないかと考えた。

長嶋は、「入院中といえども発育、発達の援助が必要となる。そのためには子ども、家族中心の医療、入院によって発育、発達、社会生活、人間関係などに遅れや歪みが無いような配慮が必要であり、医療を受ける側の「療養環境の向上」がきわめて重要である」¹⁾と述べている。更に入院中の児は、本来発達に必要な社会性や人間関係を育てる刺激、子供に必要な遊びも制限され、限られた空間で制約のある生活を強いられていると考えられる。

今回の研究では、更衣・遊び・食事動作の項目においてシーネ固定中は介助を必要としていた児でも、シーネ固定を外したことにより自分でも出来るようになったと言う児が増加した。また、これらの項目において、シーネ固定をしている時は、思うように手が動かないため児がイライラしている様子や、点滴の刺入部を気にしていたという意見が多く聞かれたが、シーネ固定を外すことによって、手が自由に動かせるようになり、児が自分で出来ることが増えた。

子どもは、様々な遊びの経験の中で喜びや満足感を体験し、同時に多くのことを学ぶ。また、遊びを使って潜在的な要求を表現して不安や不快を解消し、自己を表現する。今回の研究でも、児からは、「たくさん遊べるようになって楽しかった」「ゲームができるようになった」「折り紙ができるようになって嬉しかった」という遊びに関する意見が多く聞かれた。遊びは、子どもにとって日常の一部であり、病院での生活に遊びを取り入れるということ、子どもが病院という非日常的な環境の中で日常を取り戻すという点で大きな意味がある。シーネ固定を外したことによって、手首の屈曲や手指の運動が可能になり、自宅や保育園でできていた折り紙や携帯ゲーム機、工作、お絵かきと遊びの幅を広げることができ、93%の児が、シーネ固定

側の手を使用して遊ぶ事ができるようになっていた。吉田らは、「病気であっても、障害があっても、入院治療が行われていても、子どもは発達し続けている。つまり、愛情、食事、暖かさ、危険からの保護と同じくらいに遊びは重要なものであり、看護婦は子供の遊びのニードを充足する責任を負うべきである」²⁾と述べている。研究前は、治療優先の為にシーネ固定は必要であると考えていた。しかし、シーネ固定を外した事で、児が自ら行動する様子が多く見られた。以上のことから、児の個性や状態に合わせてシーネ固定の必要性を考える事が、児に寄り添った看護につながるという事を知った。このように、児にとって、日常生活の大半の時間は遊びであり、遊びを通して、日常生活動作を獲得し成長発達している。折り紙や工作で指先の細かい作業を覚え、お絵かきやブロックで物の形や組み合わせを学んでいく。シーネ固定を外し、自由に手や指先を使った遊びができるようになったことで、入院中でも児の成長発達を促し、児に寄り添った看護を目指すことができたのではないかと考える。更に、シーネ固定をしている際は児の注意がシーネ固定に向きやすく、固定用テープを自分で取ってしまう児や、シーネや点滴ルートを引っ張ってしまう児も居たが、自由に遊ぶ事が出来るようになったことで児の注意を点滴刺入部から逸らす事が出来、シーネ固定が無くても安全に治療が行えるということがわかった。

その反面、移動、更衣については、予測していたほど大きな変化を得ることはできなかった。これは、入院により児にとって非日常的な環境に置かれたこと、具合が悪いことなどで、親への甘えがあったことや、6歳児では、シーネ固定中であっても持続点滴を気遣いながら日常生活動作が行っていたことが挙げられる。移動については、点滴スタンドや点滴ルート等、転倒の危険も考えられたため、保護者の付き添いが必要であることが多かった。更衣については、シーネ固定を外したことにより、手指が自由に動かせるようになり、自分で紐を結ぼうと指先を使っている姿が印象的であった。

今回の研究では、入院3日目にシーネ固定を外すこととしていた。入院翌日や入院2日目はまた、児の具合や機嫌も悪く、児・母共に睡眠不足であることや、酸素投与が必要な児もいる。しかし、入院3日目になると、急性期の症状が改善し児も活気が出てくる時期である。入院生活にも慣れ始め、活気が出てくることにより、自宅や幼稚園いつもしている遊びをしたいという欲求が出てくるが、入院したことで日常的な生活から分離され能動的生活から受動的生活を強いられることや、いつも出来ていることが出来なくなってしまう事は、児にとってストレスとなる。そのため、出来るだけ早期に且つ治療の妨げとならないよう、入院3日目にシーネを外したことで、自由に手が動かせるようになり、保護者からも良い意見を聞くことができた。また、今まではシーネ固定が無ければ、自由に手指を動かすことが出来るようになり、自己抜去や点滴の漏れ等が頻回になるのではないかと心配も考えられたが、子どもなりに注意しながらも点滴側の手を使うことができ、治療上の理由から点滴が抜去になった児もいたが、自己抜去や点滴の漏れ、点滴の差し替え等が必要になる児は見られなかった。奈良間らは、「子供の感情は、乳児期から2歳頃までに基本的な発達をとげ、その後さらに分化し5歳頃には成人に見られる

情緒が一通りそろう」³⁾と述べている。児の個性や病状に合わせ、治療と日常生活動作維持の両立に向けて今後も検討を続けていきたい。

文 献

1. 長嶋正實. 小児科医から見た子どもの「療養環境」. 小児保健研究 2012; 71(2):166-9.
2. 吉田時子, 前田マスヨ, 小沢道子 他. D 小児と病気. 標準看護学講座29巻 小児看護学. 東京: 金原出版, 2004. 210頁.
3. 奈良間美保, 丸光恵, 堀妙子 他. 第5章 幼児・学童. 系統看護学講座 専門分野II 小児看護学概論小児臨床看護総論 小児看護学[1]. 東京: 医学書院, 2009. 105頁.
4. 同上. 100頁, 105頁.
5. 原田香奈, 相吉恵, 祖父江由紀子. 医療を受ける子どもへの上手な関わり方 チャイルド・ライフ・スペシャリストが伝える子ども・家族中心医療のコツ. 東京: 日本看護協会; 2013. 17頁.
6. 及川郁子, 古橋知子, 平田美佳 他. 小児看護ベストプラクティス, チームで支える! 子どものプレパレーション 子どもが「嫌」「怖い」を乗り越え、達成感を得るために. 東京: 中山書店; 2012. 59頁.

英 文 抄 録

Original article

The significance of early termination of splint fixation for intravenous drip to keep the infantile activities of daily

living

Nagaoka Central General Hospital, the fourth floor eastern ward; nurse¹⁾, chief nurse²⁾
Ayami Nakano¹⁾, Ayumi Sato¹⁾, Tomomi Watanabe¹⁾, Miyuki Inagawa²⁾

Objective: As to hospitalized infants from 3 y/o to 6 y/o with a splint fixation for intravenous drip, we evaluated the early termination of a splint on their 3rd day of hospitalization to maintain their activities of daily living.

Study design: On the observation of the splint fixation of intravenous drip among the hospitalized children with asthma, bronchitis, pneumonia, and gastroenteritis on the third day, the termination of splint fixation was done after their parental consent. The hearing investigation about the activities of daily living was performed to infants and their parents on the 6th day of hospitalization.

Results: The early termination of splint fixation for intravenous drip brought the spontaneous action of patients on the basis of a condition of a disease and a personality.

Conclusion: It is useful to improve the activities of daily living by the early termination of splint fixation for intravenous drip.

Key words: Late period of infancy, maintenance of the activities of daily living, continuous infusions, early termination of splint fixation for intravenous drip, playing, growth development, hearing investigation

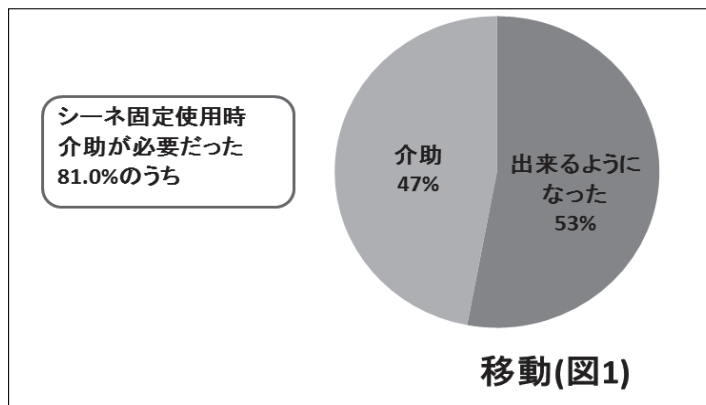


図1. 移動について.
シーネ固定使用時介助が必要だった81.0%のうち、出来るようになった児が53%と増加している

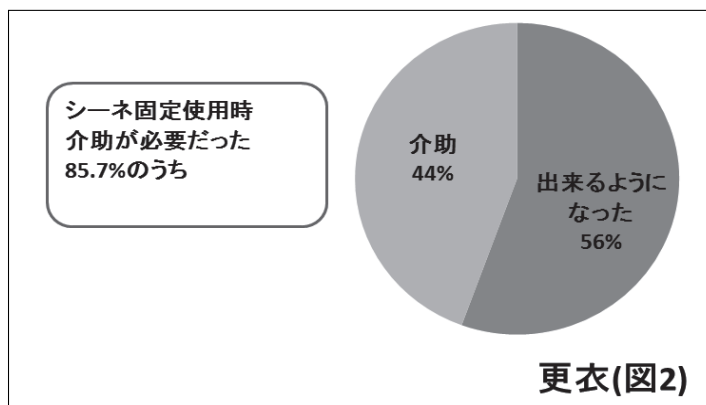


図2. 更衣について。
シーネ固定使用時介助が必要だった85.7%のうち、出来るようになった児が56%と増加している。

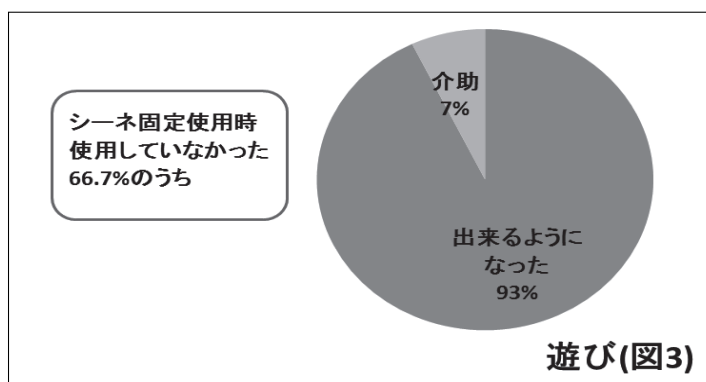


図3. 遊びについて。
シーネ固定時使用していなかった66.7%のうち、出来るようになった児が93%と大きく増加している。

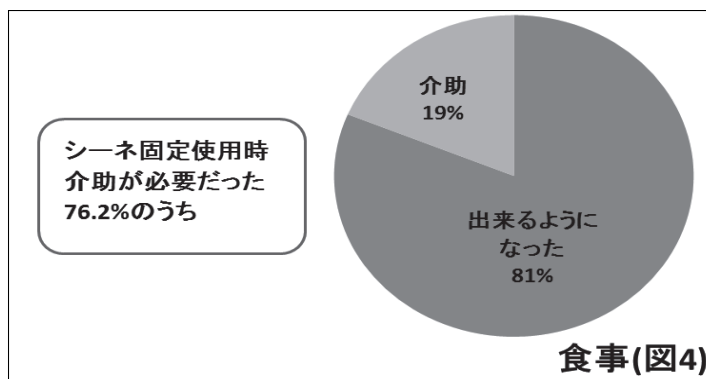


図4. 食事について。
シーネ固定使用時介助が必要だった76.2%のうち、出来るようになった81%と増加している。

表1. シーネ固定の早期外しに対する児・保護者の意見

	シーネ有	シーネ無
保護者の意見	・逆血することが多かった気がする。	・外すの心配だったが、本人が理解し気を付けていた(2名)
	・動かしづらい、遊びづらそう(4名)	・外して良かった(2名)
	・点滴側は全く使わない(2名)	・シーネ有ると自由に動かせずかわいそう(2名)
	・ぎこちない	・自由に遊べるようになった(4名)
	・点滴外してと言っていた。	・逆血が減った気がする
		・シーネ外してから、少しずつ使えるようになった。
		・少しの滴下不良だったら、シーネ外せて良かった
児の意見	ピンクの板は邪魔	・点滴トラブル無く、外せる児は外してもいいと思う
		・点滴外してしまうかと思ったが、自己抜去もなかった。
		・ズボンの上げ下げができるようになったのが一番変わった。
		・ペットボトルのふたが支えながら取れる
		・いっぱい遊んで楽しかった(3名)
	・外れてうれしかった(4名)	
	・無い方が自由に動かせてよかった(2名)	

児、保護者の意見として、シーネ固定を外すことに好意的な意見が多く聞かれた。

(2016/01/19受付)